

「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書

(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)

令和元年 11 月 28 日	
所属部局・職	霊長類研究所・修士課程学生
氏名	横山実玖歩

1. 派遣国・場所 (○○国、○○地域)
鹿児島県熊毛郡屋久島町
2. 研究課題名 (○○の調査、および○○での実験)
屋久島実習
3. 派遣期間 (本邦出発から帰国まで)
令和元年 11 月 16 日 ~ 令和元年 11 月 23 日 (8 日間)
4. 主な受入機関及び受入研究者 (○○大学○○研究所、○○博士/○○動物園、キュレーター、○○氏)
京都大学野生動物研究センター、杉浦秀樹准教授
5. 所期の目的の遂行状況及び成果 (研究内容、調査等実施の状況とその成果：長さ自由)
写真(必ず1枚以上挿入すること。広報資料のため公開可のもの)の説明は、個々の写真の直下に入れること。別途、英語の報告書を作成すること。これは簡約版で短くてけっこうです。
本実習ではPWSの屋久島ハウスに滞在しながら、屋久島西部の森林でフィールドワークをおこなった。スケジュールは以下の通りであった。 11/16 移動、オリエンテーション 11/17-19 フィールドワーク(シカ糞の採集) 11/20 フィールドワーク(サル糞の採集) 11/21 プレゼンテーション 11/22 ヤクスギランドでの自然観察 11/23 移動 参加者はシカの糞を採集するシカグループと、土壌やサル・シカの糞を採集し寄生虫を観察するパラサイトグループの2班に分かれて実習をおこなった。ここではシカグループの活動内容を報告する。 シカグループの目的は、屋久島実習に続いておこなわれるゲノム実習で使用するシカ糞のサンプルを採集することであった。シカを探して森の中を歩き、ターゲットとなる個体を決めたら距離を取りながら追跡をおこなった。ターゲットが排泄した瞬間にその地点や時間を記録するとともに、その糞を採集した。オトナオス、オトナメス、1-2歳のコドモオス、コドモメスに分けて追跡をおこなったが、コドモメスの年齢識別は大変難しく、初心者には0歳と1-2歳の区別がほとんどわからなかった。また追跡を続けていても糞をしなかったり、追えないほど険しい斜面のエリアに行ってしまったりとサンプル採集にまで行きつかないことも多く、データを集めることの大変さを実感した。しかし追跡中には親子で相互グルーミングをする様子や、オトナオスがサルとケンカのような行動をする様子などを見ることができた。特にグルーミングは、霊長類における親子間のグルーミングが主に母から子への一方向であるのに対して、シカでは双方向でおこなわれていたのが印象に残った。またシカはサルが樹上で木の実や葉を採食する際に落ちてくる食べ残しを採食することが多く、サルの群れが木に登って採食を始めると、そこに多くのシカが集まってきて採食をおこなっていた。ヒト2万、サル2万、シカ2万という屋久島独特の生態の中で発達してきた採食様式であり、シカが直接採食できる高さに植物が少ない屋久島の森林で食べ物を安定して得る一つの術なのだろう。 フィールドワークの後にはプレゼンテーションをおこなった。グループは日本人2名と外国人5名であり、自身の英語不足による言葉の壁を感じながらも、全員で意見を出し合い発表の形にすることができた。今回の実習で得たサンプルをゲノム実習で分析し、どのような結果が出るか非常に楽しみである。

「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書

(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)



図1 採集したシカの糞
光沢感で新鮮さが見分けられる。



図2 サルとシカが同じ場所で
採食をおこなっていた。



図3 休息する1歳のコドモオス



図4 群れを離れて交尾をおこ
なっていたヤクザル
交尾期の最中であった。



図5 西部林道から見た景色



図6 ヤクスギランドで
見た樹齢推定 3000 年の
紀元杉

6. その他 (特記事項など)

本実習中、講師・TAのみなさまに多大なる支援を頂きました。中でもシカグループの担当であった、京都大学野生動物研究センターの杉浦秀樹准教授、北海道大学北方生物圏フィールド科学センターの揚妻直樹准教授、揚妻芳美氏、京都大学野生動物研究センターの鈴木崇文氏には本当にお世話になりました。お礼申し上げます。また本実習にはPWSの支援を受けて参加しました。感謝申し上げます。